

建築と私

広島大学大学院工学研究科建築学専攻 1 年 今村 友里子

私が建築を学ぶようになってから、もう 9 年目になる。私は工業高等専門学校出身であるため、普通の大学生に比べて建築を学び始めた時期が早かった。それは、他の人に比べて多くを学べたと同時に、挫折を味わう機会が多かったということでもある。

挫折といっても何か大きな失敗をしたというわけでもないのだが、高専の 3 年生の時にはもう、設計課題が嫌でたまらなくなっていた。下手に知識が増えた結果、面白い形を作ればいいのか、新しい形を作ればいいのか、伝統に従えばいいのか、頑丈であればいいのか、機能的であればいいのか、自分がどのような立場で何をつくるべきかを決定できなくなってしまったのである。設計を初めてやった時は楽しくてたまらなかっただけに、出来ないという状態はかなり辛かった。

丁度そのころ、私の地元で SANAA 設計の美術館が建ち、地元の建築学生はその斬新かつ分かりやすく単純な構成と、白くて透明な軽やかな形に夢中になった。また一方では、その都市の中には伝統建築と言われるような古い町並みが残っており、この伝統的な建築物と同じような形をした美術館も存在している。例えば、自分がこの町で設計をするとしたらどちらを選択すべきなのだろうか。そしてその選択は何によって行われるべきなのだろうか。

この二つの建築の特徴は全く違うが、どちらもやはり「建築」である。この二つが持つ意味と価値は全く違うが、どちらも同じ都市（世界）の中に存在して私たちに何かを与えているという点では共通している。設計において自分がつくるものは、常に「個」であり、個としての意味と価値を持っているが、個のものがどうあるべきかという選択は、常に「全体」から行われるべきなのではないだろうか。結局のところ、私が学んでいる「建築」とは何なのだろうか。私はこのよう疑問から、根本的に建築とはどういう事なのかを学ぶ必要があると感じるようになった。

そんな時、当時師事していた先生に一冊の本を渡された。自分も学生のころ同じような事で悩んでいた、と言って渡されたその本が、森田慶一の『建築論』だった。

森田によると、建築は「強」「用」「美」「聖」という四つの存在様態を持つという。物体としての「強」、機能としての「用」は分かりやすい。しかしそれに加え、「強」「用」を超えて芸術性としての「美」があり、そして、「美」と表裏の関係としてさらに「聖」があると言う。「聖」の建築様態に関して森田は「建築空間が神々しい、聖なる、あるいは神秘的な存在として受け取られるような建築の在り方」と言う。なるほど、今まで建築を「建築物」として物体として捉えていたが、それだけではないらしい、ということまでは分かつ

たが、この建築の「美／聖」を、理屈ではなくはっきりと実感するためには、また別の経験が必要だった。

そのときのことは、今でも鮮明に覚えている。それはとても天気が高く暖かい春の日で、時折吹く風が強かった。石が組まれた用水沿いに桜が植えられ、こちら側の花は薄桃色、対岸の花は雪のように真っ白い色をしていた。用水路の脇には遊歩道があり、ところどころ座って休憩できるようにベンチが置かれている。長く伸びた枝は用水の真ん中で重なり合って、風が吹くたびに満開の花びらが空中を舞っていた。舞った花びらは水面に浮かんで、用水の流れがゆったりと下流に運んで行く。

それは神々しい程に美しい風景だった。そして、この風景は自然に出来たものではない。誰かが桜の位置を決め、間隔を決め、桜を選んでいる。誰かが石組みを組み、ベンチを制作している。このドラマチックな風景は、間違いなく誰かの手によって作りだされたものである。だからこそ一つ一つのは物理的であり、機能的である。

しかしそれ以上に、私はこの場所そのものを「美」として認識していた。美しいという感じが世界中に満ちている状態である。これは、森田の言う「超驗的に直感される空間」に他ならなかった。一つ一つの要素が、一つの素晴らしい風景としてまとまっているのだ。しかもそれは遠くから眺めるものではない。自分をも含んだ世界として受け取られるのだ。

もっと簡単に言えば、それはとても良い「空間」だったのである。建築は物ではなく空間なのだという事を、理屈抜きに実感したという経験であった。これが実感できた時、やっと私は建築とは生き生きとした場所を構成することなのだと思えるようになった。

だから様々な方法があって良いのだ。どんな形でも良いし、どんなやり方でも良い。どの方法を選択するのかは、その場所の風土や、歴史によって変わるだろう。また、作り手によっても変わるだろう。建築家の「作家性」も否定する必要は全くない。彼らはそれぞれの特徴によって空間を調和させ、それぞれの場所を生きたものにしていただけなのだ。

何、当たり前的事じゃないかと思われるかもしれないが、私にはたったこれだけの事を理解するまでに長い時間がかかった。しかしその時間があって良かったとも思っている。真剣に悩み、真剣に理解しようとしたからこそ、今では建築に関われることが楽しくて仕方がないからだ。